

論文

日本における孫文研究について¹

狭間直樹

はじめに

課題が大きいのに、私の非力ゆえに十分に責務をはたせないことを恐れますが、この会議でこのような報告の機会をあたえられたことを光栄に存じます。

まず、「研究」という言葉について断っておかねばなりません。その中心が学術的な研究にあることは言うまでもありませんが、ここでは広く紹介・評論（ときに小説）をもふくむことにします。紹介・評論と言っても研究の色彩が濃いものもあり、その境界をどこに引くべきかはなかなか決めにくいことです。換言すれば、むしろ紹介・評論といった広義の「研究」の裾野があつてこそ、アカデミックな研究もしっかりと展開することができると言えるでしょう。

最初に孫文の思想と行動計画（広州蜂起）を日本に伝えたのは1895年春の日本の駐香港領事の報告²です。それは、孫文が蜂起のための武器援助をもとめてきたことを報告したもので、日本の側がそれに関わることはありませんでした。周知のように、孫文は同年秋に武装蜂起をしようとして失敗しますが、亡命した孫文は11月9（あるいは10）日に神戸に着き、ここに日本との直接の関係が生まれました。つま

り、日本における孫文の研究史は、1世紀あまりの歴史があるわけです。

1世紀あまりの孫文研究史は、1945年の日本の敗戦を境に二つの時期に分かれます。前半の50年は日本が中国にたいして進出をはかり、さらには侵略戦争をおこして敗北にいたる時期です。後半の60年は、日本が被占領中におこった中国の革命を敵視したため、大陸中国（中華人民共和国）と国交をもたないという断絶の状態がながくつづきましたが、やがて正常な状態に復して現在にいたる時期です。

したがって戦前、前半50年の中国研究が、ごく大ざっぱに言って、孫文研究をふくめて中国にいかにか立ち向かっていくかという関係性のもとで遂行されたのにたいし、戦後、後半60年のそれは、日本を打ち負かした中国（とりわけ人民革命を成し遂げた中国）をどのように見るのかという視座の大転換がおこり、そこから次第に変化をしていったといえます。日本の敗戦を境に激変した国家間の関係は、孫文の研究にたいしても大きな変化をもたらしたのです。

上述の二時期区分は、いわば国家関係の大枠ですが、孫文研究という角度から整理すると、前半、後半ともさらに二つの時期に分けられるでしょう。すなわち、前半は1925年の孫文の逝去でもって区分されます。そして、後半は

政治的には1972年の日中国交正常化、さらに1978年の「日中平和友好条約」締結をもって平等互惠の立場に立つ学術文化交流という新しい時代がはじまります。孫文研究ないし中国近代史研究の場合で言えば、その画期を武漢で「紀念辛亥革命70周年國際學術討論會」が開催された1981年にもとめたいと思います。該会は中国の歴史学界の開放と転進を告げる号砲でした。

これを要するに、孫文研究の時期を以下の4つに区分したいと思います。

- ① 第1期 1895～1925年
- ② 第2期 1925～1945年
- ③ 第3期 1945～1981年
- ④ 第4期 1981～2005年

20年あまり前の1985年3月に中国孫中山研究学会の主催により、「孫中山研究述評國際學術討論會」が河北省の涿県で開かれ、そこで山口一郎（敬称略、以下同）が「日本人的孫文觀、孫文研究的特色与課題」という報告³をおこないました。その報告の3時期区分は、すこし違うところがありますが、基本的に私の第1～3期と同じです。私の報告はそれを踏まえておこなうことにしますので、第1～第3期については概括的なことを述べるにとどめ、本報告の重点を第4期に置くことにします。

上掲報告には「日本有関孫文著作論文目録」が付録されています⁴。それには、約750項目の単行本と論文が収められており、前者が「孫文伝・孫文論」など5節、後者が「孫文と日本・日本人」など10節に分類されて、各節内での配列は刊行年次順です。私もそれを承けた新しい「目録」を作成しているのですが、この

会議までに完成できませんでした。追って、印刷物あるいはCD版を関係者に配布するつもりでいます〔補記：注1参照〕。

1 第1期：1895～1925年

上掲「日本有関孫文著作論文目録」で全体のトップに配されているのは、「宮崎滔天 三十三年之夢 国光書房 1902年8月」⁵です。『三十三年之夢』は滔天宮崎寅蔵の自伝ですが、孫文の革命にたいする支援を生涯の事業にしようと決意した人物が書いたものですから、そこには孫文の思想と行動が精彩に富む筆使いで書かれています。中国文最初の孫文伝＝黄中黄（章士釗）『大革命家孫逸仙』（1903年）はこれの抄訳ですから、日本のみならず東アジアにおける孫文研究の出発点と見なされてよいものです。1898年に、滔天は例の *Kidnapped in London* を翻訳して「清国革命党領袖孫逸仙 幽囚録」として『九州日報』に連載していますから、孫文についての蓄積は早くからあったのです。

その後、日本では中国同盟会が組織され、その機関誌『民報』も刊行されて、孫文の支援者もしだいに増えました。しかし、辛亥革命以前において孫文に注目するものはさして多くはなく、その評価もさまざまでした。武昌蜂起の成功という驚天動地の大事件に直面して、『中央公論』11月号が特集を組みましたが、そこには大隈重信「孫は大した人物ではない」と宮崎滔天「孫逸仙は一代の大人物」なる、正反対の文章がならんでいます。

しかし孫文は、中華民国の初代臨時大總統に就任したことによって、一挙に時の人となりました。以後は終生、政局の一方のリーダーでありつづけたから、孫文の言動はつねに世の注目をあびることになります。その一端を『大阪毎日新聞』の「孫文関係報道資料集成」⁶に見てみましょう。同「集成」の採録期間は1895年11月の来日から1925年3月の逝去までの30年間、記事数はざっと2000、総字数は100万字を優に超え、新聞記事を切り抜きB5判に縮印したもので354頁もあります。その頁数で見ますと、武昌蜂起以前の16年間で17頁、5%であるのにたいし、武昌蜂起以後の15年間は337頁、95%です。単純な数字ですが、辛亥前後における注目度の激増の様をつかむには十分でしょう。

第一期における著作・論文の主流は「孫文論・孫文観」であつたと、山口は指摘しています。しかしここで留意されるべきは、南京臨時政府の臨時大總統の時期をふくめて、孫文が中央政府の権を掌握したことは一貫してなかったということです（にもかかわらず、皇帝専制支配を倒したという点で歴史の主役だったことに留意しなければなりません）。換言すれば、かれは清朝ないし中華民国の北京中央政府にたいする対抗勢力のリーダーだったのです。したがって日本の側からすれば、孫文にたいする政策はつねに中央政府と関連させて立てられるべき問題だったわけですから、その議論はきわめて複雑なものにならざるを得ませんでした。

その一端をあげますと、宮崎滔天『三十三年之夢』が孫文の革命思想に全面的に共鳴して支援を表明したのにたいし、内田良平『支那観』（黒

竜会、1913年）は国権論の立場から日本の国策と結びついて孫文を敵視し、北一輝『支那革命外史』（大鐙閣、1921年）は孫文の革命思想をアメリカ流の借り物と論難して、いわば「二級品あつかい」をしたものでした。内田が惠州起義にさいして孫文を強力に支援し、北が中国同盟会に加入して孫文革命の同伴者であろうとしたことを思えば、孫文をとりまく状況がいかに複雑、かつ流動的であつたかが分かります。

このような紹介・評論に類する孫文論・孫文観が横溢する中で、歴史的な考察に歩を進めたのは吉野作造です。吉野は反袁第三革命を具体的に検討することをつうじて、中国の革命をその基底において支える「ヤングチャイナ」、すなわち健康な新生ナショナリズムの興起を見て取りました。それを踏まえて書かれた吉野作造、加藤繁『支那革命史』（内外出版株式会社、1922年）は、世界でもっとも早く、かつ水準の高い辛亥革命史の研究書です。

2 第2期：1925～1945年

北京政変による政局の混乱を收拾するために北上し、中央政界における鼎の一脚となることを期待されたまさにその時、孫文は病にたおれて北京の地で亡くなりました。その逝去にたいし、日本人も心からの哀悼をささげましたが、なかでも、北京で日本語雑誌を刊行していた藤原謙兄の文章⁷は注目にあたいます。藤原はこう言いました。生前に国民党の首領だった孫文は、死後には「唯四億万人中の真に改革を

熱望する者の首領」となった、かれの理想は国民の心中で拡大、偶像化され、あたかも「生の基督は磔刑せられて、死の基督は永生」したように、「今後の民国は生ける孫文氏を有したよりは死せる孫文氏を有することによって其大を為」し、その革命は進展するであろう、と。

孫文逝世後、注目してよい孫文論、孫文伝があらわれました。わずか1年半後に刊行された布施勝治『レーニンのロシアと孫文の支那』（燕塵社、1927年）は、そのはしりです。布施は敏腕の新聞記者らしく豊富な材料を駆使して、大革命に焦点をあてて孫文とレーニンを対比的に検討し、両者の提携が世界政治をうごかして新しい世界を切りひらくであろうことを論じています。当時としては、出色の孫文論です。

また、王樞之『孫文傳』⁸（改造社1931年）は孫文伝の白眉です。それは、著者自身が明言するように「マルクス主義の立場から書かれた」ものですから、孫文の理論を不完全なものとして批判的に扱っているのですが、孫文が革命的民主主義者として傑出した存在であり、中国の前途がかれの革命の基盤のうえに展開されるであろうとの見取り図をしめしました。中国国民革命の渦中に身を置いた著者らしく、情熱をもって革命家としての孫文像をえがききった作品です。

藤原鎌兄の予言どおり、孫文没後わずか3年有余にして中国国民党は北伐に成功し、南京を首都に中央政權をにぎるにいたりました。政權をとった国民党は孫文を「国父」とあがめましたから、日本では大陸進出をはかるものも、善隣友好をのぞむものも、みな孫文の主義・思想を問題にしなければならなくなりました。山

口の指摘によれば、この時期に三民主義・孫文思想についての著作・文章はにわかに増えて約100篇にのぼったとのことでした。

対華政策策定のためには孫文を知らねばならないという認識を如実に示したものが、外務省調査部による『孫文全集』⁹の翻訳です。「現代支那ノ指導精神」である孫文の主義主張を理解することは「現代支那ノ認識上又我對支外交遂行上」絶対に必要なこととして、外務省が執務参考用に訳したものです。当時、もっとも完備した全集とされた胡漢民編『總理全集』を底本にして取捨をくわえたもので、「広田（外相の）善隣外交の時期」なればこそその「外務省の意欲」のあらわれだった、と衛藤瀋吉は指摘しています。とにかく、2～3年という短期間に大部の全集を翻訳したのですから、相手を知ろうとする姿勢とその意気込みは高く評価されるべきです。それまでに「三民主義」を中心に、すでにかなり多くの翻訳や解説が出されていましたが、それらはみな部分訳で、孫文思想の大きな体系をうかがうには、かならずしも十分とはいえないものでした。

訳文の良否が問題にされることもあるのですが、それを言うなら、明治新政權の創出にあたり、江藤新平がフランス「五法典」全部の翻訳を箕作麟祥に命じて「誤訳も亦妨げず、只速訳せよ」と督励したエピソードが思い起こされます。それと同様のことがこのときは、隣国に出現した新政權の指導思想を理解するために、孫文の全集を対象としておこなわれたわけです。しかも、執務参考用につくられたこの全集を市販に供しようということになり、数年後、実際に第一公論社¹⁰から刊行されました。

ところで、その第一公論社本はかなりの削除・伏せ字処置をほどこしたものでした。たとえば日韓併合を批判しその朝鮮の独立を主張する部分などがそれです。朝鮮どころか満州、さらに全中国へと侵略の歩を進めた日本の為政者に都合が悪いことは確かですが、当の相手国が国是とする思想の核心ともいうべき民族主義に覆いを掛けて国民の目から隠そうとしたのです。

三民主義に関しては、その全容を日本人に読んでもらおうとして、国民党の宣伝部がつとに1930年に上海で全訳を刊行¹¹しているのですが、それを日本に輸出することは妨害されたといわれています。妨害の具体的な様相は分かりませんが、全集の削除・伏せ字と表裏の関係にあったことは見やすい道理です。為政者の統制は批判されるべきですが、国民の側も自他の基本的権利擁護という点で反省をしなければならないことです。

このことは、日本に都合のよいところだけを引き出して利用することにつながります。それは、親日傀儡の南京「国民政府」をつくった汪兆銘こそ「国父」孫文の正統な後継者だとする宣伝となってあらわれました。そしてさらにその延長線上に、孫文思想を日本の侵略政策に結びつけようとする試みまでおこなわれるにいたります。その尤なるものが孫文の「大アジア主義」を大東亜共栄圏、東洋の共同体の原理と称賛した平野義太郎『大アジア主義の歴史的基礎』（河出書房、1945年6月）です。たしかに、孫文は所謂「大アジア主義」講演¹²において、「霸道」の欧米に対抗するために日中両国が「王道」に依拠し協同して戦おうと呼びかけました。しかし、だからといって、孫文が傀儡親日の道を

説いたことにはなりません。孫文の「大アジア主義」は民族自決を通じて帝国主義を乗り越える構想ですから、近隣諸国を「共栄」の名のもとに植民地化しようとする大東亜共栄圏の思想と結びつけることは根本的にできないことだったのです。

3 第3期：1945～1981年

敗戦により戦争遂行のためのイデオロギーが崩壊するとともに、当然のことながら、孫文をめぐる政治的、社会的な環境についても大きな変化が生まれました。

前述した沈観鼎訳『日文三民主義』が日本の出版社から『三民主義』「第二版」¹³と銘打って刊行されたのは、その一例です。その「第二版序」には、「中華民国のバイブル」にも等しい三民主義を全面的に正しく理解しようとしなかった「日本政府及び一般国民の態度なり方針が、日本敗戦の一因となったと謂っても過言ではあるまい」と書かれています。また、田中乾郎編『三民主義』なる中文本¹⁴が東京で発行されていますが、同書では140余句に語釈をくわえ、他は「辞書や語学の師」に質すようにと言っていることに鑑みるなら、日本語の知識体系をベースにした読者（華僑をふくむ）に、原文から理解するようにと求めているわけです。もって当時の時代的雰囲気的一端を伺うにたරでしょう。付言すれば、この時期に、日本人の手になる三民主義の訳本がのちに大事なもののだけでも3種が刊行されました¹⁵。

敗戦が日本の中国研究にもった意味は計り知

れないほど大きいものでした。くわえて、中国では中国国民党の政権が覆えり、中国共産党の指導する社会主義国＝中華人民共和国が誕生しました。日本の知識界、とくに左翼の知識界は二重の衝撃を受けました（右翼は敗戦によって発言力を政治的、社会的に、さらには内発的にも失っていました）。日本からすれば後れているはずの中国（中華民国）に負けただけではなく、中国に、資本主義（近代）を超えた段階と観念されていた社会主義をとる政権が誕生したからです。

この状況を国民革命から新民主主義革命への発展としてストレートに説明したのが、岩村三千夫『民国革命』¹⁶です。これは、スターリン的唯物史観にとらわれた日本マルクス主義が中国革命の展開を十分に後追いでできないでいたときに、いち早く孫文の革命から毛沢東の革命への軌跡を説明したものでした。

中国の革命の流れはそれで説明できるようにしても、「すすんだ」日本が打ち負かされたという関係をどう捉えるのかという問題の答は、そこからは出てきません。その問題にひとつの回答を提出したのが竹内好でした。竹内は戦前から『中国文学研究』¹⁷という雑誌を出して、日本人が中国を正しく理解するための道を模索してきたのですが、日本の敗戦を中国の底力の中にもとめ、その精髓を孫文の著作のなかに見つけ出しました。

1957年、『思想』雑誌に掲載された竹内好「孫文観の問題点」¹⁸は、日本の侵略に抵抗して勝利し、さらに人民共和国を生み出した中国の歴史のなかには孫文を全体として位置づけようとした意欲的な試みでした。孫文の三民主義は、「中

国の生活共同体の中で鳴り響いている生活そのものを煮つめた」思想、「革命の終局の目標を大同に置く、ほとんど永遠の過程、はるか未来にわたる不断の前進と再生を伴った思想」とされます。それは戦争に反対しながらそれを押しとどめることができなかったことへの反省を伴った評価でしたから、戦後における孫文研究に深い影響をあたえるものとなりました¹⁹。

『思想』第396号は、竹内が中心になって企画した「孫文と日本」の特集です。日本の敗戦による学術的反省と自らの立脚点の模索はすべての研究者が負わねばならない重い課題でしたから、竹内と同じ観点に立つものではないにしても、同誌には注目してよい戦前の研究にたいする総括の文章が並んでいます。戦争中において基本的には否定的にしか評価されなかった孫文像（野沢豊）、スターリン的教条にしたがったのみ理解された日本左翼の孫文像（新島淳良）、天皇制下の民主主義＝民本主義者としての孫文像（野原四郎）、孫文の民族主義と大陸浪人の関係（野村浩一）などがそれです。

戦争中、日本の研究者は国家的な規模で中国研究に動員され、時流迎合的な研究もうまれましたが、そのような中でみずからの研究をまもりぬいた人も少なくありませんでした。孫文研究のそのような著述として、高橋勇治『孫文』²⁰を挙げることができます。それは、孫文の民族主義が中国民族の独立を基本とするものであることを押さえることによって、日本を盟主とする大東亜共栄圏の構想に孫文を組み込むことを拒否しているという点で、時流に抜きんでたものでした。それを踏まえた藤井昇三の『孫文の研究』²¹は、孫文の民族主義に焦点をあわせ、

日本批判にいたる軌跡を副次的にからませた研究で、この時期を代表する研究です。

中華人民共和国成立後、日本政府がアメリカに追隨して中国敵視政策をとったため、戦後日本の中国研究は研究対象から隔絶された状況下に遂行されるという、きわめて変則的な環境のもとで新しく出発したのです。台湾の中華民国との交流はありましたが、それはあまり活発なものではありませんでした。日本の孫文研究も、いわば鎖国のような状態のもとで進められたといえます。

ただ、この時期に資料面では画期的な変化が生まれ、それが中国近代史研究、さらには孫文研究をおおいに活発にしたことは確かです。1950年代末に大陸から『中国近代史資料叢刊 辛亥革命』『民報』等が刊行され、それと対抗して1960年代に台湾から『中華民国開国五十年文献』『中華民国史料叢編』等が刊行されたことにより、日本でも第一次史料によって研究をおこなうことがたいそう容易になり、中国革命史、とりわけ辛亥革命史の研究がすすんだからです(1980年代以降、この面での発展が桁違いに飛躍的なものであったことは、ここに贅言するまでもありません)。

そのような資料的条件の好転をふまえて、小野川秀美『民報索引』²²が生まれました。「索引」は研究と見なされないのが普通ですが、13年という長い年月をかけて心血をそそいで作られたこの「索引」はまさに研究そのもののものです。新旧の思想が複雑に混じり合った『民報』の文章が難しいものであることはよく知られたことです。しかも日本で印刷されたため、誤字脱字のオンパレードと言ってよいのですが、約4

万にもおよぶ採録語句には、誤脱を補訂し、句読を正した引用文が付されているのです。中国近代史研究ないし孫文研究にとって、画期的な一基礎であることが分かるでしょう。

伝記としては、野沢豊『孫文——革命いまだ成らず』(誠文堂新光社、1962年)が新しい史料条件のもとでの出発点となった著作です。その後、横山英、中山義弘『孫文——人と思想』(清水書院、1968年)、堀川哲男『孫文——救国の情熱と中国革命』(清水書院、1973年)なども出ました。論集としては、寺広映雄『中国革命の史的展開』(汲古書院、1979年)、池田誠『孫文と中国革命——孫文とその革命運動の史的研究』(法律文化社、1983年)、横山宏章『孫中山の革命と政治指導』(研文出版、1983年)などがあります。また、中国国民党の研究としては、山田辰雄『中国国民党左派の研究』(慶応通信、1980年)が先駆的な研究です。

この時期には、孫文と関わりのふかい日本人について、かの宮崎滔天や梅屋庄吉の伝記が書かれました。滔天伝で重要なのは、上村希美雄『宮崎兄弟伝』『日本篇』上下(葦書房、1974年)ですが、これについては全6冊の刊行がおわる次期でとりあげます。梅屋は従来ほとんど知られることのなかった人物ですが、車田譲治『国父孫文と梅屋庄吉——中国に捧げたある日本人の生涯』(六興出版、1975年)がその生涯を明らかにしました²³。ちなみに、きわめてよく編集された滔天の全集²⁴と、また孫文と特別な関係をむすんだ南方熊楠全集²⁵の決定版がほぼ時をおなじくして刊行されました。

4 第4期：1981年～

1980年代は、海峡の両岸において、中国研究の発展にとって良好な環境が生みだされた時代です。すなわち、大陸では文化大革命が終息をむかえて開放改革政策がとられ、その結果、歴史の研究もかなり自由化されました。また、1987年の戒厳令解除が象徴的にしめすように、台湾では民主化が基本的に達成されました。

日本が中国にたいして国交を回復したのは1972年ですが、平和友好条約をむすんで文化交流のための基盤がととのったのは1978年のことです。そして、1981年10月には中国歴史学界の対外開放の幕開けとなった「紀念辛亥革命70周年国際学術討論会」が武漢でひらかれ、そこには中国人127名にくわえて12カ国（地域）、44名の外国人の研究者が参加しました。シンポジウムをおおう雰囲気は“明るい熱気”に満ちたもので、新しい地平が切りひらかれたことを実感できるものでした²⁶。

武漢シンポジウムをうけて、同じ10月に日本でも衛藤瀋吉を中心に「辛亥革命70周年記念国際学術討論会」が東京で開かれました²⁷。以後、国際シンポジウムをふくめて研究者の国際交流が一挙に活発化するのですが、以前には、辛亥革命や孫文についての関係資料展覧会ないし講演会はひらかれても、国際シンポジウムが開かれることはなかったのですから、研究をとりまく条件は一変したのです。

ちなみに、1984年に呉錦堂の別荘＝移情閣²⁸を利用して神戸に孫中山記念館（2005年10月に孫文記念館と改称）が創設されたことも、条件一変の象徴と言えるでしょう。記念館建設

の中心は山口一郎・陳徳仁でした。山口は日本人の中国にたいする関心が低いことを憂え、中国を知るためには孫文を知らねばならないと考えて、グループを組織して孫文の翻訳をすることから着手しました²⁹。さらに、全国の有志にはたらきかけて孫文研究会を組織し、研究会が記念館の活動をささえるというユニークな体制で出発されました（記念館や研究会を統括しているのは、財団法人孫中山記念会です）。

1985年いらい神戸の孫中山記念会が直接にかかわった国際シンポジウムは、ほぼ5年おきにおこなった大きなものだけで5回を数えます。もちろん東京でも、辛亥革命研究会が「辛亥革命80周年記念東京国際学術会議」（1991年）などを挙げてこられましたし、また中日学術交流センター・日本華人教授会議が主宰しての「中国同盟会設立100周年記念国際シンポジウム」（2005年）も開催されました。

孫中山記念会の出版物としては「孫中山記念会研究叢書」があり、その第一冊は、陳徳仁、安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集』³⁰です。これは、所謂「大アジア主義」演説の有名な最後の一段（日本に「東方王道の干城」たることをもとめた中文74字）は演説時にはなく、のちに加えられたものであることを明かにするという重要な貢献をおこなったものです。

まず、孫文研究の裾野の広がりを見ておきましょう。小説³¹の素材に外国人の孫文が使われるといったことは、日本以外ではあまりないと思うのですが、この期には興味をひかれるものが4つも書かれました。

陳舜臣『青山一髪』（中央公論新社、2003

年；2006年に文庫化して『孫文』と改題）は、十分な研究をふまえてのもので、小説とはいえ多くの創見がちりばめられています。三好徹『革命浪人——滔天と孫文』（中央公論社、1979年；中公文庫、1983年）は、史実を忠実にふまえて「希有の浪人」滔天の「孫文や中国にたいする心情」を描いたもの、西木正明『孫文の女』（文芸春秋、2005年）は日本人妻浅田ハルと大月薫をノンフィクション的にとりあげています。伴野朗『砂の密約：孫文外伝——革命いまだ成らず』（実業之日本社、1997年）はカンフー流の活劇フィクションですから史実からかけはなれたことが多いのですが、筋立てにメリハリをつけるために孫文とその革命史が利用されているところに興味をひかれます。

自分にとっての孫文像を描こうとした作品もいくつか現れました。沼野誠介『孫文と日本』（キャラム、1993年）は、小学生の時に担任の先生が「支那には孫文という偉い人がいて、三民主義を唱え、国を建て直した」云々と話してくれたことが心にのこっていたため、日本とかかわる孫文のエピソードを調べて綴った「孫文外伝」です。藤村久雄『革命家孫文——革命いまだ成らず』（中央公論社、1994年）は「孫文が建設しようとした国家についての全体像を解明しようとした」もので、田所竹彦『孫文——百年先を見た男』（築地書館、2000年）は、現在の改革のマスタープランとなった孫文思想の先見性を称揚することに的をしぼっています。

孫文に関係をもった日本人、山田良政・純三郎兄弟について、同じ年に遺族につらなる方の2冊の本が出ました。山田兄弟は、周知のよう

に、兄の良政が惠州起義の犠牲者（外国人犠牲者第一号）、弟純三郎は孫文の秘書もつとめた人物です。一は、保阪正康『仁あり義あり、心は天下にあり——孫文の辛亥革命を助けた日本人』（朝日ソノラマ、1992年2月）で、著者（ノンフィクション作家）は友人の陳澤禎（陳其美の孫）から山田順造（山田純三郎の四男）を紹介されて執筆したとのこと。陳其美が上海の山田邸で暗殺されたことはよく知られたことですが、その後もながく画家の交遊はつづいていたわけです。

もう一は、結束博治『醇なる日本人——孫文革命と山田良政・純三郎』（プレジデント社、1992年9月）です。これは上述の山田順造が父親と伯父を顕彰するための伝を執筆中に急逝し、友人の結束（ジャーナリスト）が「あとをよろしく頼むよ」といわれたのを受けて書いたものです。「手当たり次第」に書きあげたものというだけあってたしかに誤りが目立ちます。しかし、純三郎が1934年の「天羽声明」を歓迎して、そこに盛られた「理想と熱情」は「故孫文氏らの抱懐していたところ」と述べていることを批判して、孫文の真意は日中両国の平等な関係に立脚した提携にあったのだから、純三郎の見方は「孫文の“大アジア主義”の真意についての誤解」であると明確に指摘するなど、著者の執筆姿勢は確かです。孫文はその死の床でなおも、神戸での所謂“大アジア主義”演説が「日本人の心に届いたか」と気にかけていました。結束の純三郎批判は、孫文の思いが日本人の「心に届い」たことの一明証です。敗戦を境に、日本人の孫文理解の水準がたいそう高まったことの一表象といつてよいでしょう。なお、

山田家の文書は愛知大学に寄贈され、すでにその目録がつくられています³²。

さて、第3期までの孫文研究を概括すると、台湾では「孫文中心史観」が主流でした。「孫文中心史観」とは、近代＝中華民国史は興中会にはじまり、孫文の活動と蒋介石によるその継承である、という枠組みをもつものです。それは、「国父」孫文という尊称と対応したイデオロギーといえるでしょう。それにたいし大陸ではいわゆる「新孫文中心史観」が公認のものでした。「新孫文中心史観」とは、孫文を毛沢東の新民主主義革命史に先行する革命の指導者として位置づけたもので、毛沢東の革命史の「先行者」の地位に照応した評価があたえられたものです。内外のいろいろな要素がからみあって、これら両「中心史観」の影は第4期においてしだいにうすくなりました。

日本の孫文研究はもちろん、本国である大陸と台湾の研究の恩恵をこうむり、その影響を必然的にうけてはきたのですが、しかし、相対的に独自の道を歩んでいたことも確かです。その独自性は、前述したように、すでに第3期において明らかになっていましたが、この第4期にはいっそう明確となります。

萱野長知は日本人の孫文革命支援者として最重要人物の一人ですが、『中華民国革命秘笈』（皇国青年教育協会、1941年）くらいしか関係資料がなく、研究がたいへん後れていた人物です。それを惜しんで崎村義郎がはじめた研究に、久保田文次が協力して崎村義郎著、久保田文次編『萱野長知研究』（高知市民図書館、1996年）なる伝記ができあがりました。現在、能うかぎりの史料を博搜しての雄編です。その収集資料

が久保田文次編『萱野長知・孫文関係資料集』（高知市民図書館、2001年）として出され、さらに萱野の旧著『中華民国革命秘笈』（アイシーメディックス、2004年）も多くの付録をつけて覆刻されました。そのなかには、第三革命の第一次資料「金子克巳旧蔵」の「中華革命軍陣中日誌」も含まれています³³。

さて、宮崎滔天については、上村希美雄の超大作『宮崎兄弟伝』が完結しました。上述した「日本篇」2冊を承けて、「アジア篇」上冊が1987年、中冊が1996年、下冊が1999年、そして2004年に「完結篇」の刊行をみたのです。「日本篇」の刊行から数えても30年です。驚くべき忍耐と言わねばなりません。

宮崎兄弟とは、八郎（1851～1877年）、民蔵（1865～1928年）、弥蔵（1867～1896年）、寅蔵（1870～1922年）の4兄弟です。「宮崎兄弟資料説明書」の表現を借りるなら、「八郎

自由民権に散った天性の革命児」、「民蔵 土地復権を生涯の使命とした哲人」、「弥蔵 理想の国を中国革命にみた思想家」、「滔天 孫文を助け、革命に挺身した侠の人」であります。つまり彼らはみなそれぞれに、明治維新後の日本をさらに変革すべく、それぞれの考えにもとづいて我が道をあゆみ、終生その志を曲げなかったという傑物たちでした。

宮崎兄弟伝はたしかに宮崎家四兄弟の伝ですが、寅蔵にもっともエネルギーが注がれています。寅蔵の生涯は孫文と結びあわされたものでしたから、それは半ば孫文伝でもあったわけです。日本人研究者の義務ともいえる日本とのかかわり³⁴の角度からする孫文伝が、孫にとってのもっとも重要な日本人同志＝宮崎滔天を介

して、上村により書きあげられたのです。

上村の史料収集と先行研究への目配りは、驚異といってよいほど徹底的です。その一端をうかがうにたる、山田良政についてのエピソードを見てみましょう。良政は、孫文にかわって惠州蜂起の部隊に中止命令をつたえた後、解散した兵士の一部と行を共にし、惠州東方40華里の僻村、三多祝において清軍に殺されたのですが、国際問題になることをおそれた清軍の側がことさらに隠蔽したため、死亡の確証のないままに時が過ぎました。当事者が弟の純三郎に告白したことによりその死が確認されるのですが、それはすでに没後18年を経た1918年のことです。純三郎は遺骨をもとめて同地にむかいましたが、すでにその願いはかないませんでした。

それからほぼ70年、上村は1985年にみずからその地に足をはこびました。惠州蜂起の根拠地だった三洲田はその後、清朝官兵による焼き討ちに遭い、解放後はダム工事により水没して村自体が他所に移転していたのですが、村民は「今も惠州起義の地の子孫たる誇り」を抱いており、部落の故老が示した伝承記録には、「一日本人がこの戦闘に参加したこと」が明記されていたそうです。民衆に語り継がれている山田の死を知ったことはたしかに「感動的な体験」だったでしょうが、惠州蜂起の一段を書くにあたり良政絶命の地を自らの足で踏みしめるといふ、上村のその姿勢こそ“感動的”と言わねばなりません。

もう一つ、別のことを挙げてみましょう。1913年春の来日時において、孫文が桂太郎と会談し、意気投合しあったという問題です。こ

れは、学界ではかなり否定的に見られてきたことなのですが、上村はバイアスのかかった零細資料を丹念に分析して、「驚きを感じ」ながらも対談内容をふくめて有ったことと認定し、桂が「孫文と肝胆あい照らした」唯一の日本人政治家であった、と結論づけました。大胆な結論なのですが、私も基本的にその線に同意したいと思います。

言え切りが無いのですが、「完結篇」には全6冊の人名索引が付されています。「あとがき」によれば、その数はなんと3673名にのぼり、その内、日本人は2608名、中国人を主とするアジア人が870名、その他の外国人195名だということです。孫文研究にとっての一大宝庫が提供されたことは疑いありません。ただ残念なのは、大事なことが多く書かれている注釈が索引の対象とされなかったことです。また、事項索引がないことにも不満を言いたくなりますが、あまりにも多くの作業を必要とすることですから、後は要するに、電子版の作成を待つしかないでしょう³⁵。

ほかにも、第4期の日本での孫文研究には注目してよい幾つかの成果を見ることが出来ます。すでに、民族主義を通じて孫文の政治思想と外交姿勢についての研究を確立していた藤井昇三は、あらたに反袁革命闘争資金を得るための対日交渉の実態の解明をすすめ、「中日盟約」や満州「割譲」をめぐる取引のありさまを提示しました³⁶。それは、ほとんど売国的ともいえる内容を持つものだったが故に、当時には孫文がそのようなことをするはずがないとの観点からする幾つかの反対意見がだされたのですが、いまではそのような折衝が行われたことは、ひ

ろく認められるにいたっています。

日本の軍部とかなり密接な連携のもとに遂行された孫文の第三革命については、まだ研究がすすんでいないのですが、その善後策をめぐる孫文のまずい対応の実態が小野信爾によって明らかにされました³⁷。1918年6月に来日した孫文を追って、日本海軍傭兵たちが〈策電〉（袁世凱政府側の軍艦）襲撃のさいの犠牲者3人にたいする弔慰金の支払いをもとめて孫が滞在している箱根の宿におしかけた事件です。この表面化をおそれて、孫文とその支援者たちは箱根から姿をくらますのですが、これは疑いもなく最高責任者であった孫文にとって芳しからざる汚点でした。実際の責任が誰にあったかは議論のあるところですから、あるいは批判論文が現れるかもしれませんが、むしろ、そのように苦しい環境の中で孫文の救国闘争が展開されたことを正しく位置づけることによって、「等身大」の孫文像を描き、その歴史的役割とそこでの偉大性を明らかにしていくべきでしょう。

すこし角度をかえた取り組みとして、大陸と台湾と間の論争問題に一つの答を提出した場合があります。その一例は、孫文の三民主義をめぐる「三大政策」なる語をめぐる対立ですが、大陸側がそれこそ孫文の革命的三民主義の核心であり、国民党一大大会においてすでに確立されたものとしてあつかうのにたいし、台湾側はそれを孫文思想とまったく無縁のものと主張していました。私は江田憲治の助力を得て、それが1926年10月に黄埔軍校の共産党員によって確定的に提出されたスローガンであること、その形成過程そのものが国共合作から分裂にいたる国民革命の転変の過程を体現したもの

であることを論じ、大方の賛成をえることができました³⁸。

孫文思想を中国の伝統思想、とくに儒教との関係で再評価を行うべしとしたのは島田虔次です³⁹。晩年における孫文の儒教宣揚については、政治的な配慮に出るものといった非本質的な理解がされることがあるのにたいし、『孟子』の「民を先とす」るデモクラシー思想、『大学』の八条目などをあげて東洋文明の先進性を強調していることに見られるように、孫文は儒教の優越性に確信をもっていたとするものです。しかもそれは、儒家の伝統的思想は「君権抑圧」にあるとの文脈で主張されているので、今後の孫文研究に大きな刺激を与えるであろうと思われます。

以上、疎漏や間違いも多いでしょうが、とりあえず報告をおこなって各位のご意見をいただいて、好いものに仕立て上げたいと考えていますので、忌憚のないご批判をお願いします。（2006年8月稿、2006年12月修訂、2008年5月補記）

狭間直樹（HAZAMA Naoki, 孫文記念館館長 / 京都産業大学教授——肩書はいずれも学会報告当時のもの）

注：

1 本稿は、2006年11月6～8日、広東省中山市において開催された「紀念孫中山誕辰140周年国際學術

討論会」での報告である。当日には準備不足のため体裁の整った文献目録を配布できなかったのも、のちに目録は別に作成配付することにした。2007年5月に初校を作成(約1450項目)、その後、2008年3月に修正版を冊子体とCD-ROM版で作成した。

2 その文書を学界に最初に紹介したのは、山本四郎「領事川恒次郎について」『史林』68-2、1985年;「原敬関係文書」第2巻(日本放送出版協会、1984年)に残されたこの領事報告は、孫文の初期「共和革命」思想を記録した重要資料である。

3 孫中山研究学会編『回顧与展望:国内外孫中山研究述評』中華書局、1986年。

4 山口一郎編『日本における孫文関係著作・論文目録』孫文研究会、1985年。

5 後、『三十三年之夢』は、吉野作造本(明治文化全集、1926年);衛藤藩吉解説本(平凡社東洋文庫、1967年);島田虔次解説本(岩波文庫、1993年)など、5種の本がある。

6 孫文研究会資料編纂委員会「日本新聞孫文関係報道資料集成」『孫文研究』15-25、1993~1999年。「関係報道」ですから孫文に直接言及していないものも、いくらか含まれています。

7 興道庵(藤原鎌兄)「孫中山氏の死を悼む」『北京週報』153号。

8 刊行時、王樞之が鈴江言一の筆名であると気づいた人はなかったという。これは「偉人傳全集」の第22巻として刊行されたのだが、取り上げられた偉人は23人(日本人12人、外国人11人)中、非西洋人は孫文だけである。戦後、鈴江言一の名を明記して岩波書店から新版が出された。

9 外務省調査部編訳『孫文全集』上・中・下、外務省、1935年9月~1936年8月。戦後(1967年)に原書房から覆刻本が衛藤藩吉の「解説」を付して刊行され

ている。

10 外務省調査部編訳『孫文全集』全7冊、第一公論社、1939~1940年。

11 沈觀鼎訳『日文三民主義』(第1版)国民党中央執行委員会宣伝部、1930年。

12 1924年11月28日に神戸でおこなった、孫文最後の講演。広東省社会科学院歴史研究所等編『孫中山全集』第11巻(中華書局、1986年)に「対神戸商業会議所等団体的演説」の名で収められている。中文初出は、『民国日報』1924.12.8。

13 沈觀鼎訳『三民主義』第二版、日本評論社1947年。中国国民党の刊行物を第一版と見立て、日本の出版社がその「第二版」を出すというめずらしい事態は、占領下だから起こったのだろう。そのとき、沈觀鼎は連合国対日理事会の中国代表であった。

14 田中乾郎編『三民主義』龍文書局、1946年。

15 安藤彦太郎訳『三民主義』(岩波文庫、1957年);山口一郎訳「三民主義」『孫文』(世界大思想全集23)(河出書房、1961年);島田虔次訳「民族主義」『孫文・毛沢東』(世界の名著64)(中央公論社、1969年)。のち、山口訳は『孫文選集』第1巻(社会思想社、1985年)に、島田訳は『三民主義(抄)ほか』(中央公論新社、2006年)に収められた。

16 岩村三千夫『民国革命』(社会構成史体系)日本評論社、1950年。

17 『中国文学研究』(1935~1943年)は竹内好が有志と刊行したいわば同人雑誌であるが、ふつうには「支那」という呼称がつかわれていた時代にあつて、「中国」を誌名に用いたという点でも先駆性が評価されている雑誌である。

18 竹内好「孫文観の問題点」『思想』第396号、1957年。

19 この観点を敷衍した「方法としてのアジア」(1960

年の講演：『竹内好評論集』第3巻、筑摩書房、1970年所収）は「近代ヨーロッパの対抗概念がアジアであり」「未来の文明を告知するものがアジア」だという史観にもとづいて変革のための主体形成を提起したもので、その影響はたいそう広くかつ深いものとなった。

20 高橋勇治『孫文』（東洋思想叢書）日本評論社、1944年。「東洋思想叢書」といっても、中国以外はインドを若干まじえるだけで、中国も近代の人物は孫文と魯迅（筆者は竹内好）だけである。

21 藤井昇三『孫文の研究——とくに民族主義理論の発展を中心として』勁草書房、1966年。

22 小野川秀美『民報索引』上・下、京都大学人文科学研究所、1970～1972年。

23 車田譲治『日中友好秘録 君ヨ革命ノ兵ヲ挙ゲヨ——中国の父・孫文に生涯した一日本人』（六興出版、1979年）はその改訂本。

24 宮崎竜介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』全5巻、平凡社、1971～1976年。

25 『南方熊楠全集』全12巻、平凡社、1971～1975年。

26 そのような状況について具体的に検討をくわえたものが、狭間直樹・森時彦編『中国歴史学の新しい波——辛亥革命研究について』（霞山会、1985年）である。

27 その報告論文集が、Etō Shinkichi and Harold Z. Schiffrin ed., *The 1911 Revolution in China : interpretive essays / International Conference in Commemoration of the Seventieth Anniversary of the 1911 Revolution, Tokyo, October 21-23, 1981*, University of Tokyo Press, 1984.

28 その歴史は、中村哲夫『移情閣遺聞——孫文と呉錦堂』（阿吽社、1990年）参照。

29 伊地智善継・山口一郎監修『孫文選集』全3巻、1985～1989年。

30 陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集』（孫中山記念会研究叢書I）法律文化社、1989年。

以下、叢書のⅡは『孫文とアジア——1990年8月国際学術討論会報告集』汲古書院、1993年；Ⅲは『孫文と華僑——孫文生誕130周年記念国際学術討論会論文集』汲古書院、1999年；Ⅳは『辛亥革命の多元構造——辛亥革命90周年国際学術討論会（神戸）』汲古書院、2003年。〔補記：Ⅴは『孫文と南方熊楠——孫文生誕140周年記念国際学術シンポジウム論文集』汲古書院、2007年。〕

31 小説といえば日本には、武田泰淳『秋風秋雨人を愁殺す 秋瑾女史伝』（筑摩書房、1976年）なる名作がある。最近、それを承けた伝記、永田圭介『競雄女侠伝——中国女性革命詩人秋瑾の生涯』（編集工房ノア、2004年）が出された。

32 今泉潤太郎・藤田佳久「孫文、山田良政・純三郎関係資料について」『愛知大学国際問題研究所紀要』97号、1992年。今泉潤太郎・佃隆一郎・藤森猛「孫文、山田良政・純三郎関係資料補遺」『同文書院記念報』vol.4（愛知大学東亜同文書院記念センター）1996年。

33 金子克巳については『支那革命と其の前後』（私家版、1996年）がある。他に、孫文との直接の接触はすくないが、中村義『白岩竜平日記——アジア主義実業家の生涯』（研文出版、1999年）；衛藤藩吉監修・李廷江編著『近衛篤磨と清末要人——近衛篤磨宛来簡集成』（原書房、2004年）も挙げねばならない。

34 孫文と日本をとりあげた専著としては、貝塚茂樹『孫文と日本』（講談社、1967年）がある。その方面の研究はかなりあるが、代表例として外国向けの発信につとめられた彭沢周（伊原沢周）『近代中日関係研究論集』（芸文印書館、1978年）をあけておこう。

35 ちなみに、第1期で滔天と並べてあげた北一輝については松本健一『評伝 北一輝』全5巻（岩波書店、2004年）という力作が注目されるが、孫文については基本的に、北の『支那革命外史』での評価を、みずか

らの史眼でもってしかるべく修正をくわえて叙述したものである。また内田良平については、初瀬竜平『伝統的右翼 内田良平の研究』（九州大学出版会、1980年）があるが、イデオロギー的に孫文と交わる議論はない。

36 藤井昇三「二十一カ条交渉時期の孫文と『中日盟約』」『論集 近代中国研究』（山川出版社、1981年）。同「孫文の対日態度——辛亥革命期の『満州』租借問題を中心に」『現代中国と世界——その政治的展開』（慶応通信、1982年）。

37 小野信爾「＜策電＞艦襲撃事件——第三革命と日本海軍備兵」『花園大学文学部紀要』34号、2002年。これは辛亥革命90周年記念武漢シンポジウムでの報告

論文「日本海軍退役軍人对第三次革命的参与——一場不了之的起義」（中国史学会編『辛亥革命与二十世纪中国』中央文献出版社、2002年）を補訂したもの。

38 狭間直樹「“三大政策”と黄埔軍校」『東洋史研究』46-2号、1987年。のちに、楊天石「關於孫中山“三大政策”概念的形及提出」（『近代史研究』115期、2000年）により、上海方面での西山派にたいする共産党側の対応は詳細にあきらかにされたのだが、“三大政策”なるタームが黄埔で誕生したことはいっそう確定的になった。

39 島田虔次「孫文の儒教宣揚の動機論をめぐって」『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』汲古書院、1990年。

[B]「論文目録②1985-2006」

	著者	題名	収録	巻号	ページ	年	備考
1	山本四郎	「領事中川恒次郎について」(研究ノート)	史林	68-2		1985	
2	久保田文次	中国革命と大陸浪人	ひとりから	6	6-19	1985	
3	崎村義郎	孫文と萱野長知	ひとりから	6	20-46	1985	
4	松本武彦	辛亥革命運動と在日華僑	ひとりから	6	47-61	1985	
5	小林共明	陸軍士官学校と中国人留学生	ひとりから	6	62-75	1985	
6	久保田文次	孫文の遺児、横浜に健在	ひとりから	6	76-85	1985	
7	片岡一忠	孫文「中華民国臨時大總統就職宣言書」の異本の存在について	『中国近現代史論集：菊池貢晴先生追悼論集』汲古書院		329-350	1985	

『日本における孫文研究目録』（冊子版）サンプルページ

CD-ROM版では、筆者および題名に振り仮名がつけられている。